

平成 13 年度 灘のけんか祭り

松原八幡神社秋季例大祭



~ 木 場 ~

14・15日 - 宮入

皆さん、おはようございます。私は灘中学校放送部の「 」です。
ただ今から、木場の紹介と説明をさせていただきます。

・木場の屋台が中村の鳥居の手前まで近づいて来たら

東の方から、腹に「ドン・ドン」と低く響く太鼓の音が聞こえてきました。木場独特の太鼓の打ち方とその音色は遠く離れていても聞き分けることができるといわれています。また、木場屋台の宮入風景「木場の一体練り」を一目見ようと、朝早くから祭り見物にやって来る人達がたくさんいます。

平成7年に新調した、木場屋台は「播州神輿屋根型屋台」の代表作として、昔からの原型を踏襲した「水押造りの四方波切り型」という屋台の屋根に大きな特徴があり、祭り文化、伝統や歴史を大切に守り次の世代に伝承していこうという関係者の創意工夫によって製作されたものです。また今年は伊達綱と木場港と刺繍された大幟は新調しましたが、高覧掛けについては、初めての試みとして京都の祭り衣装を数多く扱う川島織物に依頼して補修を行なってきました。

さあ、皆さんいよいよ木場屋台の宮入です。木場港と刺繍された大幟と20本のお迎え提灯に先導されシンボルカラーの緑の紙手に囲まれて、威勢よく宮入りしてきます。

木場村は、およそ900年前(平安時代後期に源俊頼の和歌に「木庭といふ泊にて雨のふりけるに近き程に、よき泊まりあらば・・・」と詠まれた)港と、ともに古くから栄えた村で「木場港」と刺繍された幟はその歴史の誇りです。

そして、幟の後に20本のお迎え提灯が続きますが、このお迎え提灯の由来は神功皇后が三韓出兵から凱旋した時に木場の人々が舟提灯で出迎えたと言う故事にちなみ、木場の祭りに受け継がれたものです。尚、このお迎え提灯を持っているのは「灘のけんか祭り」に正式に参加を認められた、中学3年の男子生徒で木場の練り子の祭りは、ここから始まりません。(少子化のため最近は中学2年生も含まれています)

「デン・よっさ デン・よっさ デン・よっさー よいや しょー」この独特のリズム・テンポの早い太鼓と練り子の掛け声が一体となった宮入風景「木場の一体練り」は他の村の屋台練りには見ることの出来ない「浜で育った男のアッサリとした気風を表現する独特のもので

・木場屋台が楼門前から松原の方に進み始めたら

次に、木場屋台の造りについてご紹介いたします。現在の屋台は平成7年に新調されたもので細部にまでこだわりがあり、擬宝珠に檜、屋根に真っ白な木曾檜、それを支える四本柱には丈夫な檜、本棒・脇棒などは軽くてネバリのある吉野檜を使っています。

さらに昔からの原型を踏襲してきた「水押造りの四方波切り型」という屋台の屋根に大きな特徴があり「播州神輿屋根型屋台」の代表作として誇れる一品で、屋根の前後に配置された菊水紋と調和のとれたものとなっています。

露盤と狭間は竜野市揖保町在住の小河昭典氏の作品で、異彩を放つ露盤の彩色は平成 11 年に姫路の砂川弘征氏の手によって施されました。

それぞれの配置「屋台への取り付けは」、露盤は前後に「阿吽の唐獅子」、左右に「阿吽の仁王様」。

狭間は正面に「播磨名所巡覧図絵より木場(向山より木庭山方面を望むの図)」、後ろには「赤松弾正対永山遠江守勇戦の場」、左右には「神功皇后平産の場」「新田義貞奮戦の場」次に、高覧掛けの図柄は正面に「隠岐次郎左衛門の鷲退治」、後ろには「西塔鬼若丸の鯉退治」左右には「鎮西八郎の龍退治」「加藤清正の虎退治」が描かれています。

木場屋台には、港とともに発展してきた名残が随所に残されています。遠くからでも一目で識別できる「菊水紋」、この菊水紋は塩の積み出し港として栄えた木場港をイメージしたものです。さらに、金糸を太く重ねてねじった華麗な「金のねじ幕」、これも江戸時代の絵巻物を見ると「木場のヤッサ」だけが紅白の布を綱にねじて幕にしています。

現行の祭礼様式、屋台と神輿の練り合わせを中心にした「灘のけんか祭り」の起源は、永禄元年(1558年)約 450 年前、赤松政則によって松原八幡神社の社殿が再建され、また、その竣工祭には米俵 200 俵が寄進されました。氏子たちが非常に喜び、その米俵をかついで現在の、御旅山の本宮に担ぎ上げ本殿前に積み上げたことが、今日の屋台練りの基になったと伝わっています。

皆さん、これから繰りひろげられる各村の屋台と気迫あふれる屋台の練り合わせによる、祭り絵巻の醍醐味を最後までお楽しみください。

15日 - 御旅山

・3基の神輿が山上へ向け広畠を退出したら

皆さん、こんにちわ 私は灘中学校放送部の「 」です。

ただ今から、木場の紹介と説明をさせていただきます。

現行の祭礼様式、屋台と神輿の練り合わせを中心にした「灘のけんか祭り」の起源は、永禄元年(1558年)約450年前、赤松政則によって松原八幡神社の社殿が再建され、また、その竣工祭には米俵200俵が寄進されました。氏子たちが非常に喜び、その米俵をかついで現在の、御旅山の本宮に担ぎ上げ本殿前に積み上げたことが、今日の屋台練りの基になったと伝わっています。

東の方から、腹に「ドン・ドン」と低く響く太鼓の音が聞こえてきました。木場独特の太鼓の打ち方とその音色は遠く離れていても聞き分けることができるといわれています。また、木場屋台の宮入風景「木場の一体練り」を一目見ようと、朝早くから祭り見物にやって来る人達がたくさんいます。

平成7年に新調した、木場屋台は「播州神輿屋根型屋台」の代表作として、昔からの原型を踏襲した「水押し造りの四方波切り型」という屋台の屋根に大きな特徴があり、祭り文化、伝統や歴史を大切に守り次の世代に伝承していこうという関係者の創意工夫によって製作されたものです。また今年も伊達綱と木場港と刺繍された大幟は新調しましたが、高覧掛けについては、初めての試みとして京都の祭り衣装を数多く扱う川島織物に依頼して補修を行ってきました。

さあ、皆さんいよいよ木場屋台の登場です。木場港と刺繍された大幟と20本のお迎え提灯に先導されシンボルカラーの緑の紙手に囲まれて、威勢よく入場してきます。

木場村は、およそ900年前(平安時代後期に源俊頼の和歌に「木庭といふ泊にて雨のふりけるに近き程に、よき泊まりあらば・・・」と詠まれた)港と、ともに古くから栄えた村で「木場港」と刺繍された幟はその歴史の誇りです。

そして、幟の後に20本のお迎え提灯が続きますが、このお迎え提灯の由来は神功皇后が三韓出兵から凱旋した時に木場の人々が舟提灯で出迎えたと言う故事にちなみ、木場の祭りに受け継がれたものです。尚、このお迎え提灯を持っているのは「灘のけんか祭り」に正式に参加を認められた、中学3年の男子生徒で木場の練り子の祭りは、ここから始まります。(少子化のため最近では中学2年生も含まれています)

「デン・よっさ デン・よっさ デン・よっさー よいや しょー」この独特のリズム・テンポの早い太鼓と練り子の掛け声が一体となった「木場の一体練り」は他の村の屋台練りには見ることの出来ない「浜で育った男のアッサリとした気風を表現する独特のもの」です。

次に、木場屋台の造りについてご紹介いたします。現在の屋台は平成 7 年に新調されたもので細部にまでこだわりがあり、擬宝珠に檜、屋根に真っ白な木曾檜、それを支える四本柱には丈夫な檜、本棒・脇棒などは軽くてネバリのある吉野檜を使っています。

さらに昔からの原型を踏襲してきた「水押造りの四方波切り型」という屋台の屋根に大きな特徴があり「播州神輿屋根型屋台」の代表作として誇れる一品で、屋根の前後に配置された菊水紋と調和のとれたものとなっています。

露盤と狭間は竜野市揖保町在住の小河昭典氏の作品で、異彩を放つ露盤の彩色は平成 11 年に姫路の砂川弘征氏の手によって施されました。

それぞれの配置「屋台への取り付けは」、露盤は前後に「阿吽の唐獅子」、左右に「阿吽の仁王様」。

狭間は正面に「播磨名所巡覧図絵より木場(向山より木庭山方面を望むの図)」、後ろには「赤松弾正対永山遠江守勇戦の場」、左右には「神功皇后平産の場」「新田義貞奮戦の場」次に、高覧掛けの図柄は正面に「隠岐次郎左衛門の鷲退治」、後ろには「西塔鬼若丸の鯉退治」左右には「鎮西八郎の龍退治」「加藤清正の虎退治」が描かれています。

木場屋台には、港とともに発展してきた名残が随所に残されています。遠くからでも一目で識別できる「菊水紋」、この菊水紋は塩の積み出し港として栄えた木場港をイメージしたものです。さらに、金糸を太く重ねてねじった華麗な「金のねじ幕」、これも江戸時代の絵巻物を見ると「木場のヤッサ」だけが紅白の布を綱にねじて幕にしています。

皆さん、これから繰りひろげられる各村の屋台と気迫あふれる屋台の練り合わせによる、祭り絵巻の醍醐味を最後までお楽しみください。